



人権週間 (12/4～12/10) にて

12月8日の朝礼で人権について話をしました。

1948 年、今から 66 年前の 12 月 10 日に、国際連合で、世界人権宣言がつけられました。12 月 10 日は世界中が「人権デー」とされています。これに基づき、日本では、毎年、12 月 4 日から 12 月 10 日までを人権週間としています。

それでは、人権とは、どんなことでしょうか？

「人が生まれながらにもっている権利」わかりやすくいえば、人はだれでも自由であり平等に生きることができ、一人一人が大切にされるということです。

学校生活に置き換えれば、いじめやいやがらせがなく、毎日しっかり勉強できる、いろいろな活動に思い切り取り組むことができる、友だちと楽しく過ごすことができるということになります。

では、充実した楽しい生活のためには、お互いがどんなことに気をつければよいのでしょうか。みなさんは、それを知っています。毎週のようにそれを言葉にしています。そう、「甚小なかよし宣言」です。ここに書かれていることは、お互いを大切にしようことであり、人権を大切にすることなのです。

そして、この世に生きていることは、とても大きな意味のあることなのです。

このような話の後、上記の曲を子どもたちに聴いてもらいました。実は「いのちの理由」という曲は、11 月 29 日（土）の「子育て支援地域交流会」（弥富市で開催）、11 月 30 日（日）のあま市人権講演会という 2 つの場で紹介された曲でもあります。子どもたちが「一人一人がかけがえのない存在であり、自分を大切に、他人を大切に」という気持ちを一層高めて生活してくれることを願っています。

「いのちの理由」 (さだまさし)

私が生まれてきた訳は 父と母とに出会うため
私が生まれてきた訳は きょうだいたちに出会うため
私が生まれてきた訳は 友だちみんなに出会うため
私が生まれてきた訳は 愛しいあなたに出会うため

春 来れば 花自ずから咲くように
秋 来れば 葉は自ずから散るように
しあわせになるために 誰もが生まれてきたんだよ
悲しみの花の後からは 喜びの実が実るように

私が生まれてきた訳は 何処かの誰かを傷つけて
私が生まれてきた訳は 何処かの誰かに傷ついて
私が生まれてきた訳は 何処かの誰かに救われて
私が生まれてきた訳は 何処かの誰かを救うため

夜が来て 闇自ずから染みるよう
朝が来て 光自ずから照らすよう
しあわせになるために 誰もが生きているんだよ
悲しみの海の向こうから 喜びが満ちてくるように

私が生まれてきた訳は 愛しいあなたに出会うため
私が生まれてきた訳は 愛しいあなたを護（まも）るため



【一人一人が大切な存在】

子ども同士の“かかわり、つながり”

教師の週案の一部です。

今週、初めて、毎週行われている「ハンカチ・ティッシュ・名札調べ」が、すべて忘れ物0（ゼロ）になった。ひどいときには2ケタになることもあったクラス。1学期半ばから生活委員会の提案で学級内で毎朝取り組んできた。なかなか改善されず、・・・「なかなか難しいな」と思っていたが、いつの間にか子ども同士で「次は絶対ゼロにするよ」という声をかけ合っていた。ついに放送で「ゼロ」のクラスとして発表してもらえた。子どもたちの自主的な根気よい取り組みが実を結び、本当にうれしかった。

子ども同士で目標をもち続け、係を中心に声をかけ合うなど地道に取り組んできた成果の一つです。上記のような取り組みは一人では達成できないもので、一人一人の意識の高まりがあってこそです。そして、一人一人の意識は、雰囲気をつくりその雰囲気が広がる中で高まっていきます。教師を含め大人の役割は、子どもたちが抱いた意識が折れないように励まし、ときにはよりよい方法について助言をして、支えていくことだと思います。いわゆる「サポーター」です。

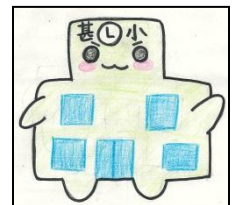


【規範意識は心の栄養から】

H26. 11. 27 ストーリーテリングより

千葉県より視察に来校

12月8日（月）に千葉市美浜区の小学校の校長先生19名が甚目寺小学校を視察にみえました。目的は、甚目寺小学校がこれまで取り組んできたESD（持続発展可能な開発のための教育）の具体的な内容を知るためです。本校の「ふるさと甚目寺」を全校統一テーマにしたふるさと学習は、将来の地域の担い手という意識を高めるといふねらいのもと、地域とのさまざまなかかわりを通して学んだことや考えたことを校内外に伝え、つながりを深めるという点で注目されています。



“拍手されるより、拍手するほう”

中日春秋
「一百本を超える映画に出演して、八十二歳で逝った高倉健さんは、スターとして喝采に包まれ続けた。その名優が我を忘れて、手をたたき続けたことがあったという▼沖縄の石垣島で高倉さんはたまたま、小さな小さな学校でくり広げられている地域総出の運動会を目にした。大声援の中心を見れば、おじいさん、おばあさんが縄をなう競争をしている。もう走る力も綱を引く力もなくなったお年寄りが自慢の技を競う姿に、みなが声をからし応援していたのだ▼そんな光景に震えるほど心を動かされた高倉さんは、絵本『南極のペンギン』（集英社）に書いた。〈ぼくの仕事は俳優だから、よくひとから拍手される。でも、拍手されるより、拍手するほうが、ずっと心がゆたかになる。そう思いながら、ぼくは手をたたきつづけていた。▼高倉さんを評し、ビートたけしさんは「いるだけで映画が成立する」と言い、『鉄道員』などの名画とともに生んだ降旗康男監督は「健さんは、役を演じなくても高倉健として映画のなかに存在できる」と語った▼小さな運動会の何げない、しかし人々の心の優しいつながりに胸を打たれ、一時間でも背筋を伸ばしたまま拍手をし続ける。「感動させること」以上に「感動すること」を大切にしたい俳優、それが健さん▼銀幕に映し出されていたのは、そういう人としての魅力だったのだろう。

2014.11.19

【H26. 11. 19 中日新聞】